

イベント “くもりのちはれ” 私の長崎

ライオンズクラブ国際協会 L C I F 理事長
アルバート・F ブランデル

世界各地を旅しながら思い出すのは日本の長崎のこと。三度目の日本訪問でした。北京からソウルを経て定刻福岡に到着。空港到着ロビーで私を待っていたのは I D・L 不老・L 杉本夫妻がたの迎えでした。すぐに車に乗り夕日の沈む西の方へ。宿泊予定のホテルまで約 1 時間 30 分、日本の太陽の沈む速さに驚きながら高速道路を一気に走り抜けホテルに到着。入室後、荷解きもしないままただちに日本の役員の皆さんと夕食をとりながら翌日からのスケジュール打ち合わせをしました。食後もホテル自室で二人の I D と通訳の山本さんを交えて明日の L C I F 研修会の資料を見せながら具体的な打ち合わせをしました。日本の皆さんは真面目で凄くタフでした。

朝の食事を済ませ 9 時より移動開始、最初の目的地は長崎原爆投下中心地点の平和公園でした。公園の記念碑に用意されていた花束を妻と二人で捧げました。私の心の中はとても微妙で不思議な感覚にとらわれていました。私の父は太平洋戦争が終わってすぐに長崎に海軍の一将兵として進駐していたからです。1945 年、原爆が長崎に投下された終戦直後はそれまで殺し合いをしてきた国同士で、お互いに口を聞くことが出来なかった時代であったと、幾度となく父から話を聞いていたからです。私の表情は少し固くこわばっていたはずです。公園からはすこし階段を登り次の訪問先の原爆資料館に案内されました。館長さんの案内で 1 時間余りの見学が始まりました。時間をかけて説明される館長に戸惑いながら日本国民の戦争の痛みや苦しみを感じていました。そのとき周りにいた子供たちが一緒に写真を撮って下さいと集まってきました。おそらく旅行か休みの時間に資料館の見学に来ていた学生さんたちだったと思います。私は何か嬉しくなって突然のリクエストに応じ子供たちと写真のポーズをとりました。気軽にサインもしました。自分でも驚いています。冷たかった体が急にあっためられ、心の中の氷が溶けていくように感じました。私は日本の子供たちの無邪気で純粋な行動が嬉しくなって、心のそこから感動してしまったのです。その後に訪問した長崎新聞社の副社長とのお話の中で私はそのときの感動した思いを率直にお話しました。彼もとても喜んでくれました。父にも長崎での体験を電話で話しました。日本の子供たちの自然にとったフレンドリーな接し方に驚きと親しみを父も強烈に感じたようです。日本は素晴らしい国です。人種や文化はもとより、いままで自分が悩んできた戦争という困難な問題でさえ一瞬に吹き飛ばしてくれた大きな気持ちの国家、民族だということを体験しました。日本の子供たちは過去をきちんと見据えながらも未来を担う大きな力を持っていると私は思いました。私は翌日の L C I F 研修会でも話しました。将来のライオンズクラブを支えていく日本の子供たちに明るい未来を感じることが出来ました。私は大声で これは “ミラクル” 奇跡だと叫びました。

研修会も終え、長崎での素晴らしかった最後の時間を大浦天主堂とグラバー邸で過ごし、日本での素晴らしい思い出を、時を越えて、父とともに過ごした長崎をあとにしました。いつか又ゆっくりと訪れたい世界の “NAGASAKI” Never forget!



